



ハノーファー市が後押し 公共施設で、デポジットの リユースカップ導入！

紙コップのコーヒーを片手に歩く風景は、ドイツでもよく見かける。ドイツで年間 30 億個のカップが消費されており、資源の無駄使いが批判されている。

ハノーファー市は年々増えるばかりの紙コップを減らそうと、リユースカップの導入を決めた。有機分解できる素材で、洗浄して 70～80 回使える。1 個 2 ユーロのデポジットをかけ、市内での流通を目指している。

以前はコーヒーというと、喫茶店で飲みながら新聞を読んだり、おしゃべりをするというのが普通だったが、最近はチェーンのカフェが増

え、持ち帰りが一般化。カフェやキオスクなどあちこちで「Coffee to go」と英語表示を見かける。一つのスタイルとして市民権を得ており、中には店内で飲むのに紙コップのみというチェーンのカフェもある。

市は大きな催し会場や会議場、見本市をはじめ、サッカー場など公共施設や公共性の高い場所でのリユースカップの使用を目指す。徐々に一般のカフェや、持ち帰りコーヒーを提供しているパン屋などでも導入を進めていく予定だ。

デポジットカップだと自分で洗ったり、お店に返しに行かなければならないから、どこまで使用が広がる

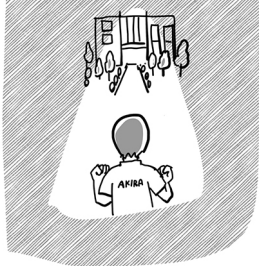


赤と黒の色違いがおしゃれなリユースカップ

か未知数である。だからこそ、自治体が音頭を取ってすすめることに意義がある。ちなみにドイツでは 2015 年、一人当たりのコーヒー消費量は年間 162 リットルで、ビールの 106 リットルよりも多かった。

ごみかんドイツ特派員 田口理穂

AKIRA の 成長記録



ドイツの学校は小学 4 年生までなので、6 月に小学校の卒業式があり、明は大泣きしました。ほとんどの子が泣いていましたが、しばらくするとケロツとする子が多い中、明は最後まで泣いていました。よっぽど学校が楽しかったんだな(それとも気が弱いのか)。

4 年間クラス替えはなく、担任も同じなので、結びつきはとても強いようです。入学時クラスには 25 人いましたが、留年や転入出で入れ替わりがあり、卒業時は 19 人でした。卒業後は大学を目指すギムナジウムに行くか、職人や一般職になる実践学校に分かれるのですが、明のクラスは 15 人がギムナジウムに行きます。市内には 15 ほどギムナジウムがありますが、偏差値による格付はなく、人気のところはくじ引きです。

残念ながら明は希望する 5 校からもれ、全く違う学校に振り分けられました。そのため州学校局や市、学校と交渉し、新聞社に理不尽さを訴え、紆余曲折の末、第 5

希望のギムナジウムに何とか潜り込むことができました。留年生のために用意していた席が一つ空いたというのです。

その学校は一年前にできたばかりで、明の上は一学年しかなく、伝統もなく、サークル数も少なく、校舎もまだ工事中(いずれ 9 学年入るが、今は 2 学年分しか完成してない)で、私は少々不満でしたが、「入ると決まった学校が一番いいと、親は信じるべし」と友達に言われ、考え直しました。いくら学校の評判が良くても、先生やクラスメートとの相性もあるでしょう。

また、聞いた話では、新設校ゆえに先生たちはやる気満々で、教室には最新設備がそろい、子どもたちは上の学年によるプレッシャーがなく伸び伸びしているとのこと。運とタイミングで決まったのですから、これによいのでしょう。その学校には小学校時代の友達もたくさん行くし、明は 8 月 4 日の入学式を心待ちにしています。

追記:受験はいやだいやだと思っていましたが、努力がまったく意味を持たないというのも、なんとも切ないものだと初めて知りました。その分、勉強についていけないとどんどん留年させられるので、入ってからが本番です。